

百花文庫

わが歳時記

山口 誓子

26

創元社

百 花 文 庫

26

わ が 歳 時 記

山 口 誓 子

創 元 社

記時歲がわ

昭和二十二年八月十五日 初版發行
昭和二十三年十月五日 再版印刷
昭和二十三年十月十日 再版發行

定價六十圓

著者 山口 誓子

發行者 矢部 良策

大阪市北區橋上町四五

印刷者 井村 雅有

兵庫縣淡路郡志賀町一五八九ノ一

版元 株式會社 創元社

大阪市北區橋上町四五
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
振替口座 大阪五七〇九九番
東京一五六五番
會員證號 Δ 二一九〇八二

配給元 日本出版配給株式會社

目次

新年

一步をかけぬ

一

青々新年

五

春

早春

二

春水・花

四

野火

六

種痘

三

十三詣

三

鈴鹿の峠

三

練の句のこと……………四〇

映畫……………四二

夏

馬を冷す……………五一

氷室……………六〇

晝寢……………六二

生きもの……………六七

眼鏡……………七四

札幌の南瓜……………七九

秋

月……………八二

秋の風……………九二

詩人と農夫……………九六

冬

老	101
藁	106
法師蟬その他	110
無花果	117
葡萄	125
太祇と四明	127

冬の夜	133
手袋	137
「花あしび」より	140
狐火	145
風	151

後

記	154
---	-----

新 年

一 歩 を か け ぬ

虚子先生に

石 段 に 一 歩 を か け ぬ 初 詣

といふ句がある。昭和九年一月一日の作、註に「旭川來。子供孫等と鶴ヶ岡八幡宮に初詣」と記されてゐる。

旭川翁は年末の診療を終ると、その日の夜行で鎌倉に赴くのが年々の例であつた。鎌倉に赴くことは即ち虚子先生の膝下に赴くことであつた。

虚子先生は、遙々訪ね來る旭川翁を前年と同じ微笑を以て迎へられた。

旭川翁が先生と家族の人々と共に鶴ヶ岡八幡宮に詣でたのは、夕ぐれにちかかつたか。

虚子先生は

夕ぐれもまだつづきをる初詣

といふ句を作られ、又、やゝ距つた御手洗に眼を遣つて

遠方にある御手洗や初詣

といふ句を作られた。

いづれも一見さりげなくして内に滋味を藏する句であるが、私は劈頭に掲げた句のことを云ふ。

鶴ヶ岡八幡宮前面の石階は仰ぐばかりに高かつた。虚子先生はその第一段に先づ右足をかけられたのである。それは長い石階にかけられた第一歩であつた。併し、それは試みの第一歩ではない。かけて後、氣が進まねば、止めてしまつてもいゝといふやうなそんな第一歩ではない。上りに上り、飽迄上らうとする第一歩である。上らうとする意志の第一歩である。あとの全行程を展開せしむべき重要な第一歩である。初詣の句なるが故に、いよいよ「一步」が利く。

「一步」を斯く解して、私はこの句に異常の興味を覚えるのである。

虚子先生に

標をはいて一步や雪の上

といふ句がある。昭和六年一月十六日、家庭俳句會に於ける作。標は「かんじき」と訓む。

雪中を行かんとして、沓に標を穿いてゐた。標をはいた歩みはやゝ勝手がちがつたが、その足で屋外に出で、雪の上に先づ右足を踏み出した。そしてその雪を標の下に強く踏みしめて見た。この第一歩も亦試みの第一歩ではない。嫌になつたら引き返してもいいといふやうなそんな第一歩ではない。行手は何里の道なるかを知らぬ。踏み出したが最後、行きに行き、飽迄行かうとする第一歩である。行かうとする意志の第一歩である。行手の道はその第一歩より始まつてゐた。その第一歩なくしては行手に道の展開はないのであつた。

この「一步」を斯く解して、私はこの句にも亦異常の興味を覺えるのである。

*

虚子先生に

汗をもてするより他はなかりけり

といふ句がある。昭和十年七月五日、家庭俳句會に於ける作。

讀んで直ぐ私は、何事かを爲さねばならぬとせらるゝ先生の氣魄を感じとる。氣魄がこの作の内部に充満してゐるからである。一步誤まれば、その氣魄のためにわれとわが身を溺らすや

うな危い句であるが、それが「汗」といふ季題によつて、一點に引き緊められ、集中せしめられ、そしてそれが、「汗をもてするより他はなかりけり」とうち出され、流露せしめられてゐる。

「汗」はもとより句を統一するものであるが、私は更にこの「汗」を、働くもの——肉體的にも、精神的にも——の「汗」として感じとる。汗なくしては目的に達すべからざるものとせらるゝ先生の諦念に似た氣持に觸れるのである。

この諦念は、やがては、かの標をはいた「一步」なくしてはに通じ、石段にかけた「一步」なくしてはに通ずるものである。

*

私はそれ等の句そのものに感銘を深うした。それ等の句から何かそれ以上のことを引き出さうとすることは避くべきかも知れない。併し、虚子先生の句中の「一步」は、私達の新たなる出發の「一步」に他ならないとし、虚子先生の句中の「汗をもてするより他はなかりけり」は私達の新たに出發せんとする場合の「汗をもてする他はなかりけり」に他ならないと、假りにさう云つて見ることは、強ち虚子先生の句に對する冒瀆ともならぬのではないか。

一步一步進むより他はないのである。

機關車は裾も湯げむり初詣
行く限り鐵路かがよふ初詣
初詣終へ來てなほも伊勢駛る
初詣終へ來し汽車も燈るころ

青々新年

青々句集『妻木』に載する新年の句中、私の最も敬服するのは
薪水の胼を拭ふて手毬かな
である。解しがたきひとのために云はう。

字典の類は「薪水」を「薪と水と、ともに生活に必要なもの、轉じて俸給の義とす」と説くけれども、こゝはさやうな意味ではなく、寧ろ「薪水之勞」といふ場合の「薪水」にちかい。「薪水の胼」は、平常薪を摺み、水を使ふが故に生じた胼である。私は直ちに、下婢のいたいたしき手を想ふ。「薪水の胼」は實に見事なる省略であつて、表現の面に必要缺くべからざる

もののみを残してゐる。

つぎに、「胼を拭ふて」は胼を拭ふのではない。胼の手をつむが如くにして撫づるのである。手を替へてはそれを撫づるのである。恐らくは年頃の下婢であらう。「胼を拭ふて」の可憐なる、私はその絶妙なる表現を三嘆してやまぬのである。青々は、おのれの云はんとするところの的確を期して、字句を選びに選んだひとである。

「手毬かな」は「手毬つく」といふに同じ。

——正月のめでたさよ。下婢も呼ばれて手毬をつく。日頃荒々しき薪を掴み、いつも冷たき水を使ふ下婢の手には胼が出来てゐた。年頃の下婢は毬をつかうとして、胼の手の甲を交るがはる撫で、満顔に喜色を湛へて毬をつきはじめてたのである——。

青々句集『鳥の巢』より私はつぎの句を抽く。

掃初や數峰しろき水の上

變な習慣があつたものだ。『民間歳時記』は「元日ヨリ三日ニ到ツテ掃除ヲ爲サズ」と記し『俳諧歳時記』は「元日家内を掃除せず、新年の陽氣を重んずるの義なり」と記してゐる。萬物發生の氣を内にとゞめんとしたのである。

それはさて置き、俳句にあつては、元日掃かず、二日に至つて始めて箒をとる。これを「掃

初」と云つた。

「數峰しろき」は、雪峯のいくつか白きこと。青々は「雪峯つゞく」などと云はずして「數峰しろき」と云つた。用意の存するところである。

「水の上」は、包括的なるが故に曖昧の字句たるを免れない。「水」は河ともとれ、池ともとれ、湖ともとれる。「水」をそのいづれにとるかはその各自の我田引水の鑑賞に任すに如くはない。私にあつては、「數峰しろき」がおのづからにしてその「水」を決定する。その上に白き數峰を置く水は、河にあらず、池にあらず、湖であらう。

——正月二日、はじめて箒をとつた。家は湖に臨み、湖には白き山々が立ち並んでゐた。湖上の雪峯は清麗にして壯嚴であつた。人はこの湖山を前にして、しきりに屋塵を掃き出してゐる。自然はきびしく、人はその一角にはかなき生を營むのである——。

青々句集『松苗』より私はつぎの二句を抽く。

鳥追のかほよくて知る人もなし

「鳥追」、今はない。編笠をいたゞき、三絃を弾き、門々に唄をうたつて錢を乞ふ門附のことである。多くは卑賤の婦女なりしと。

『東都歳時記』の「初春路上圖」は、日本橋南詰を畫いて、行人裡、餅花を肩にせる町人の

うしろに二人の鳥追を歩ましめてゐる。

子規は「鳥追や夕日に下る九段坂」と詠ひ、鳴雪は「鳥追の笠傾けて風を見る」と詠つた。

「かほよくて」と詠はれた青々の鳥追は美貌であつた。

「知る人もなし」、この界限にその女を知る者はなかつた。いづこよりか渡り來つて、又いづこかへ去り行く女であつた。

——鳥追の女は、突き抜けるやうな美貌だつた。いづこの者ともわからなかつた。素姓が知れぬといふ心安さに男はその女を喰ひ入るやうに見守り、恍惚としてその美しさに引き込まれた。

この句、私には、男の好色を描いてゐるやうに思はれる——。

昭和十一年の作、青々時に六十八歳であつた。

女にも乳見られじと着衣始

「着衣始」は「きそはじめ」と訓む、今風に云へば、春著を着初めることであらう。他に解かねばならぬ字句はない。

——女は平常著ふだんぎを脱いで、春著を着ようとしてゐた。そのとき、同じ部屋に他の女がゐたので、女は胸のはだけより乳をぬすみ見られまいと、襟をかきあはせ、兩の腕に胸元を締めつく

るが如くして春著を着こなして行つた。男にはもとより、女にも乳を見られまいとするその女の成熟した姿態が思はれる――。

「乳を見られまいなどと考へるのは、年頃の女のこととは思はれない。私の妻はこの句を見て女の年齢を三十前後と見立てた。果して然るか。

昭和九年、作者六十六歳の作。青々の示した女性描寫の極致であらう。青々は昭和四年、六十一歳にして再婚してゐた。

人は青々の「常住の若さ」「常住のあでやかさ」を讃へた。私も亦「女とし男とし坐す月の前」「女我手の蚋^{よと}叩きくれし遊山かな」などに青々の若さを見、あでやかさを見る。

着衣始の句を見たとき、私は直ぐ大正二年の文展に出陳された栖鳳の「繪になる最初」といふ繪を想起した。その繪には、半ば着物を脱がんとしてゐるモデルの女が描かれてゐたが、私はその女の肩あたりに「女にも乳見られじと」する肉體のかたさがあつたやうに憶えてゐる。私はその繪を文展の繪葉書で見た。そのとき私は小學校の六年生であつたが、少年とはいへ、見るべきところは見遁さなかつたやうである。

住吉に風揚げゐたる處女はも

落ち羽子に潮の穂さきの走りて來
 遣羽子や海原かくすさうび垣
 繋りたる靱の港や羽子日和
 初瀬の驛獅子舞汽車を待てるかも
 大學の空の碧きに凧ひとつ
 儒の家に魔を破るべき弓と矢と
 儒門の子からだ贏ひよき破魔矢かな
 正月の鬘を歌劇に道に見き
 凧の絲青天濃くて見えわかぬ
 凧の絲天には見えず指に見ゆ
 七高の正月休む城の垣
 ちかき田ぞ神の若井をただける
 年曉けぬ竹をまじふる神の杜
 一月やうぶすなちかく野鍛冶の火

春

早

春

湯の山といふところははじめて行つたのです。峯ちかくに残る雪は、自動車が近づくうちに見えなくなり、道は雑木林のある山裾を次第に上つて行きました。谷にかゝつてゐる橋のところで自動車を下りた私達は、三月の終りといふのに細かい雪の降つてゐる中に立ちました。そこからしばらく山路を登つて見ようといふのです。右手谷向うに崖をなす山には日がしづかにあたり、どこかで鶯のおぼつかない聲が聞えます。春いまだとゝのはずの感が深いのです。山坂を炭車が下りて來ます。車輪の逸るのを抑へ抑へして下りて來ます。山の空に奥の峯が見えます。谷には巨きな石がうち重なり、激流のところには猫柳の銀がほぐれてゐます。やがて道に自轉車の横たへてあるところを通りました。ひとは谷向うにゐて、低木に鈍をふるつてゐま